V．先輩からのメッセージ

終わりよければすべてよし？
——6年後の経過報告——

1998・1999年度岩本ゼミナールチューター
山本　英司

「終わりよければすべてよし」とはシェークスピアの戯曲のタイトルだが、むしろこの界隈では故・森嶋通夫氏の「自伝三部作」の最終巻（朝日新聞社、2001年）のタイトルとして有名であろう。クエスチョンマークを付けたのは、36歳で「終わり」はないであろうということと、果たしてこれで「すべてよし」と言えるのだろうかということとからである。しかしながら、ともかく一安堵というのが正直な気持ちである。……これからが正念場であるということは承知しているつもりであるが。

副題の「6年後の経過報告」というのは、6年前の本誌に寄せた「改題及び我が学問研究への曲がりくねった道程」の続編という意味合いである。と言われても現役及びここ数年のゼミ生諸君には何のことやら分からないであろう。また、6年以前の読者の方々ももはやお忘れかと思う。よって、本題に入る前に若干補足しつつ復習しておきたい。

1988年に京都大学経済学部に入学した私は、3回生となった1990年に本山美彦先生のゼミに所属し、1991年からは根井雅弘先生のゼミにも出席させていただくようになった。1992年に京都大学大学院経済学研究科修士課程に進学してからは、制度上も両先生を共同指導教官として登録することとなった。1993年に岩本武和先生が京都大学に赴任されてからしばらくは本山先生と大学院合同ゼミを主宰されていたこともあり、私は岩本先生の御指導も受けることとなった。

あまり深く考えることなく修士論文を書き上げて1994年に博士後期課程に進学してから私の学問人生は行き詰まりを見せ、一時は研究を放棄しようと決意したほどであった。しかしそれでも大学院に籍だけは置き続け、大阪府の高等学校公民科教員採用試験を受けたり図書館司書を目指したりなどしていたが、年齢制限等もあってにっちもさっちもいかなくなり、1998年2月28日、29歳の誕生日の前日、本山・岩本両先生に経済学への復帰の意思を伝え、諒承を得たのであった。折しも高橋信弘氏が就職のため岩本ゼミのチューターを離れることとなり、後任者として私が抜擢されたのであった。チューターの仕事は経済学のよいリハビリとなったが、当時のゼミ生には御迷惑をお掛けした。

前述のように私は1994年に博士後期課程に進学したのであったが、周知の通り博士後期課程の標準修業年限は3年のところ、それと同年数だけ留年できるということで2000年3月が私の大学院生としてのリミットであった（実は休学という手も使えたらしいが、それはあまりにも脱法的行為であろう。今も使えるかどうかは知らない）。よって1998年から

1999年にかけて私は研究業績と称するものをいくつかでっち上げ、その抜刷・コピーまたは掲載証明書を武器として公募に応募することとなった。そして2000年2月2日現在、計10大学の公募に応募したが、既に計6大学から不採用通知が届いている、というのが前回までのあらすじである。

全く我が身の恥を晒してばかりであったが、前回の手記は意外な反響を呼んだようで、そこで紹介した「修士課程は前科1犯、博士課程は前科2犯」という私の友人の言葉は岩本ゼミ界隈で流行語となったとのことである。そのことで「社会復帰」を早まるあまり、あたら優秀なゼミ生を中央官僚に転ぜしめ、もって学界に損失をもたらしたとすれば内心忸怩たるものがある。ともあれここから本題である。が、事の性質上、あまり機微に触れる話は書けない。嘘を書くつもりは無いが、「誤解を招く」表現は使うかも知れない。また、記録と記憶に照らして一応事実関係を確認はしたものの、いくつか漏れや記憶違いがあるかも知れない。その点あらかじめ御了承願いたい。

さて、既に御明察の通り、2000年2月2日現在ではまだ4大学から返事が届いていないとしたが、結局、1999年度においては、10大学とも玉砕であった。

2000年4月からは私は「研修員」となった。今の制度はどうか知らないが、当時は、大学院を任期満了で追い出された後の標準的な身分であった。「学生」ではなくなるので学割は使えず、1988年の学部入学以来12年間にわたり住み続けてきた吉田寮からも追い出されることとなった。そして京都府南部の自宅（と言っても私が吉田寮に住み続けている間に家族が2度の引越しを経て移ってきたところであったが）から京都大学に通うこととなった。その際、院生研究室に研修員の分際で本棚と机を融通していただき御迷惑をお掛けした。

2000年度には計10大学の公募に応募した。また、公募とは別に話をいただいた計2大学にも書類を送り、それに加えて日本学術振興会特別研究員（PD）にも応募した。全て玉砕であった。1つだけ面接に呼ばれたところがあったが、どうも書類選考を通過したからではなく、よくは分からないが何かの手違いであったらしい。また、それとは別に、まずは履歴書と業績目録を提出させた後、書類選考を経て業績の実物の提出を求められたところもあったが、「第1次書類選考通過」とはしゃいだものの、結局面接には呼ばれなかったということもあった。今から思うに、学振にすら選ばれないようではもはや研究者として見込みは無いと早々に針路変更を考えた方がいいのであろう。実は当時も薄々そうは思っていたものの、今さら後には引けないのであった。

2001年度には計8大学の公募に応募した。また、公募とは別に話をいただいた1大学にも書類を送った。確か年齢制限にはまだ引っかかっていなかったが、学振にはもう応募しなかった。公募とは別の大学より面接に呼ばれたが、いずれにせよ玉砕であった。

今の制度はどうか知らないが、当時は、研修員は原則1年で、1年に限り更新することが可能であった。よって私の研修員としての身分は2001年度末の2002年3月限りなのであった。身分だけの問題であればまだしも、それに留まらないのっぴきならない事情もあっ

た。と言うのも、前回の手記にも書いた通り、私は日本育英会（現・独立行政法人日本学生支援機構）から計572万4000円にのぼる借金を背負っていたが、一定の期限内に免除職と言われる教育研究職に就けばその返済が免除されることになるところ、その期限は学籍喪失後2年以内だったからである。やはり研修員になどならずに博士後期課程在学中に休学して「在学」期間を延長しておきべきだったかと後悔してももう遅い。

ところが思わぬところからその方が担当されていた非常勤の授業を譲っていただけることとなり（よく考えたら当の大学を無視した話なのであるが）、2002年4月から龍谷大学で非常勤講師をすることとなった。これで私の履歴書に穴が開くことが避けられ、そして何より育英奨学金の返済義務からもしばし逃れられることとなったのであった。と言うのは、非常勤講師は免除職ではないもの、その職にある期間は免除職に就くまでの期限を延期させる効果があるからであった。また、ささやかながら「教育歴」も付くこととなった。担当科目が「日本経済論」というおよそ私の専門からは掛け離れたものであり受講生諸君には御迷惑をお掛けしたが（何だかあちこちに迷惑を掛けてばかりである）、ともすれば現実から遊離した机上の空論になりがちな私の思考に現実感覚を与えてくれるいい勉強になった。

2002年度には一切公募に応募しなかった。これまで公募に落ち続けてきた、それも実質的に1度も書類選考すら通過しなかった経験から、そこを突破するには、目覚ましい研究業績か、それが適わぬなら（適わぬであろう）博士号の学位が必須であると思われたからである。また、今の制度はどうか知らないが、課程博士論文の提出資格は博士後期課程退学後3年以内であるところ、2000年3月に退学した私にとってのリミットは2003年3月であったので、ここは余計なことを考えずに博士論文の執筆に専念する時期であると思い定めたのであった。

ところが実際には専念どころではなくいつの間にか1年が過ぎようとしていたが、非常勤先での後期試験の採点終了後、とにもかくにも学位請求論文をでっち上げ、締切3日前の2003年3月28日金曜日、徹夜でプリントアウトした原稿を持って四条烏丸のキンコーズに駆けつけ、提出用6部のコピー・製本を大至急ということでお願いし、同日夕方、経済の教務に提出したのであった（まあ31日の月曜日でも間に合っていたとは思うが、ひょっとして年度末につき窓口閉鎖かもと心配したのであった）。そして7月17日の口頭試問を経て、2003年9月24日をもって私は京都大学大学院経済学研究科博士後期課程を修了し、京都大学博士（経済学）の学位を得たのであった。

博士号の学位を得た上で、2003年度には計2大学の公募に応募した。うち1大学より面接に呼ばれた。きちんと書類選考を突破した上での初めての面接であった。確率50%、と言うにはあまりにサンプルが少なすぎるが、これまで実質的に書類選考に落ち続けてきたことを思えば一歩前進であった。

そして2004年度。計4大学の公募に応募し、うち計3大学より面接に呼ばれた。確率75%、学位取得後通算67%。何だか、募集科目さえ適合していれば必ず書類選考は通過す

るような気がしてきたほどであった。同時に採用内定通知が来たらどうしようとか、面接直前に他大学の内定通知が来たらやはり面接はキャンセルするのが礼儀であろうかとか、どうせならこちらの大学の方がいいので先に面接を受けた大学からは内定通知が来ないでほしいとか、あらぬ夢想に耽ったりもした。インターネットで引越し先のあたりをつけたりもした。だがいずれも玉砕。こうなると逆に、何か人格的に問題があるのではないか、そうなるとこれはもう一生望みがないのではないか、研究業績を上げることは出来たとしても人格に磨きをかけるにはいったいどうすればいいのかと、一気に悲観的になってくるのであった。

そうした中、公募とは別に話をいただいた 1 大学、まあもう名前を明かしてもいいかと思うが奈良産業大学経済学部に話が決まったのであった。教授会の承認は 2005 年 3 月 11 日であった。その後理事会が控えていたりするのかも知れないが、この原稿の執筆時点（3 月 15 日）では私には分からない。とにかく理事長名の「採用内定通知」が届き、そこに同封されていた「就任承諾書」に私は記入押印して返送したのである。

それにしても、研修員の身分を喪失するとともに育英奨学金の免除職就職期限が切れるギリギリの時点で非常勤講師が決まり、そして課程博士論文提出締切ギリギリに学位請求論文を提出したのに引き続き、今回もまたギリギリであった。と言うのも、前述の通り、非常勤講師の職にある期間は育英奨学金の免除職に就くまでの期限を延期させる効果があるとは言え、その期限は退学後通算して 5 年以内だったからである。よって、2000 年 3 月 31 日に退学した私の場合、2005 年 4 月 1 日までに免除職に就職しなければならなかったのであった（もっとも、就職が決まりさえすれば別に返済に応じてもそれほどの負担ではないのであるが）。それに加え、龍谷大学での非常勤講師についても、私の担当科目は夜間部であったところ、2002 年度入学者を最後としての夜間部廃止に伴い、2004 年度をもって私の担当科目の開講終了が言い渡されていたのであった。よって、もしも採用が決まっていなかったら全くの身分なしに陥るところであった。しかし、災い転じて福となり、授業負担が軽減されることとなった次第である。

以上で話は終わりである。一言で言えば、36 歳にしてようやく定職を得た情けない男の物話である。希望を与える話であろうか？　それとも、なまじ幻想を与えたがために「再犯」を誘発して「社会復帰」をより困難にせしめるハーメルンの笛であろうか？　それは読者諸賢が各々判断されたい。

最後に、本山先生、根井先生、岩本先生、その他諸先生・諸先輩方、これまで御指導・御助言いただきましてありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。この間、実に多くの方々に御心配いただき、また陰に陽に動いていただいたことは、まことに勿体無く思っております。また、これまでパラサイトシングルしてきた両親にもこれからは親孝行に努めたいと思います。孫の顔を見せるのだけは期待してもらっても困るのですが……

4期生　猪俣　明彦（経済産業省）

岩本ゼミ現役生の方々へ

今年卒業される方々におかれましては、心からお喜びを申し上げます。
ゼミで得た経験・能力を生かし、新たなフィールドで「プロフェッショナル」となり、
そのとき皆様にお会いできることを期待しております。

ゼミで現在活躍されている方々におかれましては、
「無尽蔵な時間の中でアカデミックな研究ができる貴重な今」を大事にし、
今後のゼミ活動が充実したものとなるようお祈り申し上げます。

私は、経済産業省というやや特殊なフィールドで、
国士のプロフェッショナルとなるべく、日々精進の毎日が続いております。
そのためにも、せめて四半世紀程度先の内外経済社会のありようをスコープすべきなの
しかしながら、だからといって
「少子高齢化」「財政圧迫」「年金不安」というような、
「社会に広まるワンフレーズがもたらす漠然な不安」に萎縮しながら、
世の風潮に流されたまま社会で過ごしていく、というのはあまりに空しいことです。
過去にもどれだけの人が「円高不況」というようなワンフレーズに踊らされたことか。

そうならないためにも、
現実を疑い、単なる評論家に終わらず、世論に流されず自ら調べ、自ら実行し、
そして批判を受けながらも新しい価値を生み出していく「プロフェッショナル」として、
自分を精進させる日々であります。」

5期生　久田　洋平（日本銀行）

岩本ゼミのみなさまへ

岩本ゼミＯＢの久田といいます。
大学を卒業し、はや５年が過ぎてしまいました。大学当時の友人には、既に転
職したり、ヨーロッパなど異国で研究したりと、当時とはかけ離れた生活をし
ている人間も数多いです。

私はどうかというと、現在、調査統計局で、価格調査の仕事に取り掛かってい
ます。今は、着任して間もないため、なかなか不慣れな部分も多いですが、興

味ある仕事に楽しく取り組ませて頂いています。

日本銀行で公表している統計の中に、企業物価指数（ＣＧＰＩ）と企業向けサービス価格指数（ＣＳＰＩ）というものがあり、私は、その指数を構成する銘柄（鉄など）の価格調査をしています。近年、原材料（鉄鉱石、石炭）の価格高騰や、中国の需給逼迫を受け、鉄の値動きが激しく、四月以降の自動車向け熱延薄板の価格動向は、、、というように、、、

・・・まあ、小難しいことはやめて、、、

社会人生活に入ると、自分のやりたい勉強や遊びの時間が奪われてしまいます。卒業される皆さんは、今しかやれないこと（長期の旅行、気を失うくらいまで毎晩飲みつづける飲み会など）を是非とも実施してください。多分、学生時代にしか出来ないと自分で考えていることは、本当に学生時代にしか出来ないと思います。

（あと、岩本先生と藤島君へ）

岩本先生、僕はあまりゼミに積極的に参加するゼミ生ではありませんでしたが（不義理なゼミ生だったと思い、反省しています。）、調査統計局で経済周りの仕事に携わることになり、今後、お世話になるかもしれません。勉強不足の自分ですが、いろいろとご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

藤島君、、、今後もよろしくね。

８期生　熊野　聖史（伊藤忠）

みなさま

官庁、日銀など公的機関でご活躍の皆様が多い中、「ど民間」の企業（伊藤忠）に就職して2年経ちます。まだまだ後輩の皆さんに「社会人としての心得」なんて言える立場でもなく、覚えた傍から変わっていく会計基準、商法と格闘中、まだまだ修行の身です。

卒業される皆様、ご卒業おめでとうございます。年功序列ももう目に見えて崩れてきました。
是非１年目から周りに遠慮せず活躍いただきたいと思います。がんばってください。

9期生　沓脱　誠（日本銀行）

10期生の皆さん

ご卒業おめでとうございます。早いもので、皆さんとは1年近くご無沙汰しております。どういう風の吹き回しか、現在は、縁もゆかりもない札幌にて北海道経済の景気分析に従事しています。大学を出るまで関西にどっぷり浸っていたせいか、当地での雪の多さと寒さに愕然としております。ここには、我が愛すべき「阪神タイガース」はありませんし、「やしきたかじん」の毒舌トークはいわずもがな。そんな私の楽しみは土曜の深夜に、カップラーメンをすすりながら、「探偵！ナイトスクープ」を見ることくらいです。そろそろ大阪弁の禁断症状が現れてきた今日この頃です。

卒業後は、学業の世界にとどまるにせよ、就職するにせよ、皆さんには、様々な経験が待っていることでしょう。ある程度好き勝手に行動することが許されていた大学時代とは違って、つまらない雑事やルールに従わざるを得ないことも多くなりますが、一方で、願ってもないチャンスに巡り会い、充実した時間を過ごす事も多くなるはず。ゼミ時代には2年間ほど同じ時間を過ごしたわけですが、皆さんには、なにかしら内に秘めた強さを感じました。そんな皆さんの今後のご活躍を期待しております。

最後になりましたが、今年は青竹会が開催されるとのこと。岩本先生や柴田さん、現役生を始め、皆さんに再開する日を楽しみにしております。

Ⅶ. 編集後記

先日、１０年ほども前に書かれた岩本ゼミの機関誌を学部の図書室で読んでいました。現役のゼミ生も知らないことかもしれませんが、経済学部図書室の開架の書棚には岩本ゼミの機関誌が第１号から第４号まで並んでいてすぐに読むことができます。先生の前書きや当時ゼミ長をされていた方が書かれた活動報告を読んで感じることは、ゼミの異様なまでの熱気です。教官と学生という枠を取り払って交わされる議論のなんと活発なこと。学問的な知見をゼロから創り上げようとする心意気が機関誌の文章から伝わってきて正直驚いてしまいました。

自分は現在の様子しか知らないので、雰囲気の違いについては先生に訊いてみるより他にないのですが、メンバーの真摯な姿勢は今でも変わってはいないと思っています。インゼミの直前に夜を徹してテーマについて語り合うという伝統は今も健在です。自分の経験を振り返ってみても、このゼミで求められることの多さ、レベルの高さは相当なものであり、運営に携わった二年目はゼミのある火曜日を中心に一週間が回っていたことを懐かしく思い出します。他のゼミではメンバーの士気が上がらず、活動が停滞しているとも伝え聞く中、岩本ゼミは学部でも有数の「鍛えられる」ゼミになっているのかも知れません。来年度の２回生、３回生の皆さんにはこうした好条件を生かして有意義な活動をしてほしいと思っています。

さてここで、三年間のゼミの活動でお世話になったたくさんの人に感謝の言葉を記しておきたいと思います。まず岩本先生。私事になり恐縮ですが、自分が進路のことで窮地に陥ったとき、すぐ相談に応じてくださったことに感謝の念が絶えません。先生のさまざまな方面にわたる関心の広さにはただ驚かされるばかりでした。今後ヴィラ・ロボスを聴く時には、夏合宿で行った出石の風景とともに先生のことを思い出すにちがいありません。

柴田さんには、ゼミの運営を中心に大変お世話になりました。とくにインゼミを準備するにあたって、献身的に指導してくださったことが印象に残っています。３回生のときに書いた日韓FTAについての論文には柴田さんのコメントが端々で利いています。

それから、このゼミで同じ時間を共有した先輩と後輩の皆様。10期生は人数が少なかったため、先輩の皆さんには１年前と同じことを、後輩のみんなには１年先と同じことをしてもらっていたと言っても過言ではありません。ゼミでもそれ以外でも、ざっくばらんに話し合えたことは大学生活のいい思い出の一つです。どうもありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

最後に、各方面でご活躍中の先輩方。岩本ゼミの機関誌第９号をここに完成させることができたのも、皆様の有形無形の力添えがあってのことです。とりわけお忙しい中、機関誌にメッセージを寄せていただいたことに対して深く感謝します。果たして 10 年前と同じように熱気が伝わる誌面となったかどうか、編集者としては心許ない限りなのですが、卒業していく 10 期生、それから今年度活躍した 11 期生・12 期生の心意気をこの機関誌から少しでも感じていただければ望外の幸せです。

2005 年 3 月 16 日　　松岡　孝恭

岩本ゼミナール機関誌　第9号
2004年度版

2005年3月24日発行
京都大学経済学部
岩本武和研究室

禁無断転載